

1 「学習評価」とは

☆評価の「妥当性」と「信頼性」

学習評価に当たっては、その評価方法及び評価結果が、目標の実現を測るという点から妥当で信頼できるものになっているかということが重要です。

例えば、生徒やその保護者に対して、単元（題材）の評価規準や評価方法等の学習評価の方針についてあらかじめ周知する等、妥当性と信頼性のある評価を目指していきましょう。

☆個人内評価

観点別学習状況の評価や評定には示しきれないもの、特に「感性や思いやり」といった、生徒一人ひとりの良い点や可能性、進歩の状況等についての評価です。

生徒が学習したことの意義や価値を実感できるよう、日々の教育活動等の中で生徒に伝えることが重要です。

生徒への言葉掛け、ワークシートへのコメント記入等によって生徒にフィードバックしましょう。

目標に準拠した評価

目標に準拠した評価は、学習指導要領に示す目標に照らし、その実現状況を見る評価のことです。観点ごとに学習状況を分析的に捉える「観点別学習状況の評価」と、総括的に捉える「評定」の双方とも、目標に準拠した評価で行います。

計画的に評価する

生徒の学習状況を適切に評価するには、評価規準に合わせて学習活動を構想し、評価方法を定めることが必要です。

その単元（題材）で何を身に付けさせるのか、ねらいを明確にするとともに、どのようにして生徒の思考や発言・行動を見取るのか、学習活動のどの場面で生徒の変容を見取るのか、「努力を要する」状況（C）の生徒へはどのように支援するかを想定し、評価場面を精選しながら計画的に評価しましょう。 → 2章-3、4

「指導に生かす評価」と「記録に残す評価」

学習評価には二つの側面があります。

「指導に生かす評価」は、生徒の学習状況を分析的に捉え、その結果を教員の指導改善と生徒の学習改善に生かすために実施するものです。生徒の様子を観察し、日々の授業の中で常に行います。

「記録に残す評価」は、生徒の学習状況を把握し、記録するために実施するものです。単元（題材）等のまとまりの中で適切に設定した時期において、「おおむね満足できる」状況（B）にあるかどうかを評価します。 → 4章-2

「指導と評価の一体化」に取り組み、生徒のためのより良い授業を考えていきましょう。 → 2章-3、4章-7

小さな一歩を認めよう

個別支援が必要な生徒への対応を考えよう

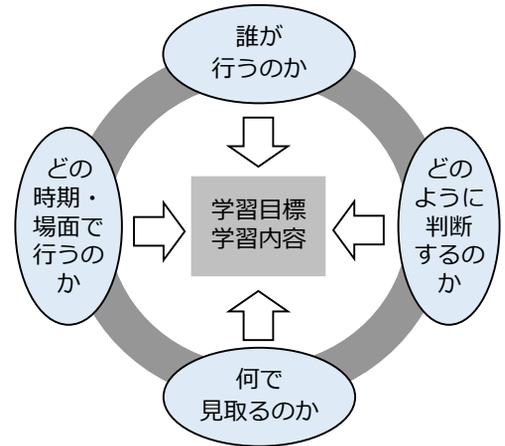
生徒が自分の進捗で努力し、学習していることを認めましょう。小さな一歩を認めることで、生徒は自信を持ち学習することが楽しくなります。



評価の進め方

評価活動には、生徒の行動や発言の状況の見取り、ペーパーテストやノート、ワークシート、レポート等の記述や作品からの見取り、自己評価等のポートフォリオ評価、パフォーマンステストによる評価等があります。評価方法は、評価規準と組み合わせて設定します。

図 評価方法の決定



評価方法の段階

観察・点検

- 行動の観察・・・学習の中で、評価規準が求めている行動の「観察」をします。
- 記述の点検・・・学習の中で、机間指導などにより記述の内容を「点検」します。

確認

- 行動の確認・・・学習の中で、行動などの内容が、評価規準を満たしているかどうかを「確認」します。
- 記述の確認・・・学習の中で、記述された内容を、ノートや提出物などにより「確認」します。

分析

- 行動の分析・・・「行動の観察」や「行動の確認」を踏まえて、その内容を「分析」的に評価します。
- 記述の分析・・・「記述の点検」や「記述の確認」を踏まえて、ノートや提出物などの記述の内容を「分析」的に評価します。

「学習評価を踏まえた授業づくりの道すじ」

(令和2年3月改訂神奈川県教育委員会) より抜粋

☆評価方法の例

- ・ルーブリック
成功の度合いを示す数レベル程度の尺度と、それぞれのレベルに対応するパフォーマンスの特徴を示した記述語（評価規準）からなる評価基準表。
→ 4章-5
- ・ポートフォリオ評価
生徒の学習の過程や成果などの記録や作品を計画的にファイル等に集積。そのファイル等を活用して生徒の学習状況を把握するとともに、生徒や保護者等に対し、その成長の過程や到達点、今後の課題等を示します。

学習活動中での評価

例えば、話し合い活動のとき、どのような評価をすればよいのでしょうか。本時のねらいに合わせて考える必要があります。

一般的には、他人の話を聞いているとか発言をしているといった話し合いそのものの活動状況など量的なものを評価するのではなく、話し合いを通じてその活動のねらいを達成できているかといった質的なものを評価します。